

2. 各報告要旨

1) 東アジア

東アジア(中国)の地域研究の現状ならびに東京外国語大学に
おける地域研究

中 嶋 嶺 雄

「東アジア(中国)に関する地域研究の現状」というテーマを私がいただいたことにつきましては、一つには、私どもの大学が現在、地域研究研究科という大学院を持つ数少ない大学だということもあり、かねがね地域研究についてかなりいろいろと私どもも論議を進めているということがあろうかと思えます。

もう一つは、ここにいらっしゃる石井先生、板垣先生、米山先生、片倉先生などにご参加いただきまして、一昨年の秋に私どもの大学で私が実行委員長になりまして「地域研究と社会諸科学」という国際シンポジウムを開催いたしました。内外から数多くの専門家をお招きいたしまして、地域研究に関するさまざまな議論を闘わせたということがございます。その成果というのでしょうか、全体のまとめは『地域研究の現在』という題で、カリフォルニア大学(サンディエゴ校)のチャルマーズ・ジョンソンさんと私の共編で大修館書店から発刊されております。ご参加いただいた先生方の貴重なご意見もありまして、おそらく地域研究に関する議論はこの本にほぼ出尽くしておるのではないかという、若干手前みそで恐縮ですけれども、そんなことがあるような気がいたします。

もう一つは、いま私が研究代表者になりまして文部省の科学研究費の重点領域研究で「東アジア比較研究」というものをやっております。これは人文・社会科学分野の重点領域研究第1号だったものですから、その後板垣先生のさらに大きなイスラム研究が進んでおりますけれども、そういう意味で東アジアを中心とするわが国の研究動向にある程度通じているということがあるのではないかという気はいたしております。

そういうような立場を踏まえまして、同時に私が専門とする中国研究に焦点をしばって、中国研究というものを地域研究として考えた場合、どこにどういう問題があるか。つまり、”地域研究としての現代中国学”というようなものについて、まずお話させていただきたいと思います。

ご案内のように、地域研究とは何かについてはいろいろ議論があるわけではありますが、私のように地域研究の優位性をかなり強く主張する立場からいたしますと、いわば既成の社会科学のディシプリンに対するアンチテーゼだというふうに考えてもいいのではないかと思います。このように考えるところに地域研究の意味があると同時に、そう考えたたんまり地域研究というのはいろいろ難しい、既存の学問体系なり、学問的な組織なり、アカデミズムの中でも、ある意味では刺激的、挑戦的に受け止められますし、それと同時に常に足を引っ張られる、たたかれるという宿命にあるのではないかと考えております。

ところで、ディシプリンについてですが、もちろんさまざまの社会科学のディシプリンの中にも、たとえば歴史学のように、かなりディシプリンとしての個性があいまいというか、やわらかい、フレキシブルなものもありますし、あるいは経済学などのように非常にその点がハードなものもあるわけではありますが、いずれにしましてもそういうディシプリンに対する挑戦である。ということは、逆に既成のディシプリンによっては、現代社会の大きな変動なり変化、特にアジアのような非西欧世界の変化をつかみきれないという問題があるのではないかと思います。

私自身はヨーロッパの学問を軽視しようということでは決してないわけですが、いずれにしましても、たとえば今日のN I E Sと言われる台湾とか韓国とか、そういう諸地域の発展を取りましても、マルクス主義のグランド・セオリーではとても解明できない。ではマックス・ウェーバーのセオリーならで解明できるかということになりますと、これも役に立たない。ウェーバーには、私もかなりいろいろ学んでおりまして、彼の中国に関する非常に深い学識には敬服の限りでありますけれども、

にもかかわらず、東アジアの最近の社会的・経済的發展を見通すわけにはとてもいかなかったような気がいたします。

そのように考えますと、いわば19世紀のグランド・セオリーが、20世紀の後半以降の今日の社会にはもう限界を見せている。そういう中で、非西欧世界というか、アジアというか、そこの發展のダイナミズムをとらえる一つの総合的な学問として地域研究が位置づけられるのではないかと思います。

しかしながら、これはわが国のみならずのことですが、いわば地域研究というは、従来学問分野ではかなり継子扱いをされてまいりました。アメリカでもMITの政治学者で有名な中国研究者でもあるルシアン・パイ編の*Area Studies and Political Science*という本が出ており、私もはいつも大学院でテキストにしておりますけれども、その副題が「ライバルかパートナーか」となっていることに明らかなように、政治学からライバル視されてたたかれるというよりは、従来は一段と低いもの、つまりディシプリンが重要であって、地域研究は一段と低いものというふうに見なされていたわけであります。そういう高みに立った学問体系それ自体の限界が今日叫ばれているだけに、地域研究が一つの挑戦として位置づけられるのではないかと私は考えております。

しかしながら、同時にそれは、いわばヨーロッパ中心主義に対して、戦後の一時期、あるいは一部の理論家の中ではやったように、何でもアジアの反逆とかアジアの挑戦ということだけを強調していればよいというようなわけにはいかないわけですし、もっとそれと違った、アジアとヨーロッパを相対化した上で、さらにそれを総合するような学問として地域研究を考えてみるのではないかと考えております。

卑俗なたとえで恐縮でございますけれども、先ほど19世紀のグランド・セオリーというようなことを言いましたが、今日の20世紀、特に後半になってみますと、そういう一人の大思想家の体系というものに頼れない現代社会の多様な發展があるわけでありまして、そういう状況、ちょう

どそれは音楽の世界で言えば技術的にはこれほど進歩しているのに、18世紀や19世紀と違って、では20世紀後半の巨匠を捜せという捜しきれない、そういう時代と対応したところに地域研究の現在があるような気がしております。

そういう私なりの勝手な解釈からすれば、先生方の前で恐縮ですが、そういう地域研究は、やはり基本的にはコンテンポラリーな同時代史を解明する学問だというふう位置づけていいのではないかと。もちろんヨーロッパの中世を研究するのに、特に最近流行の社会史などは地域研究的なアプローチが多いと思いますけれども、しかしながら我々が考える地域研究というのはそういう意味では近代以降を対象とすると考えていいと思います。中国の古代史をやる場合にもいろいろ地域研究的なアプローチというものもあり得るかもしれませんが、これもちょっと対象からはずしておいていいのではないかと。

そうしますと結局、地域研究というのは、それぞれの対象地域、あるいは諸外国、諸国民の行動様式とか特質をいかに理解するかということに、結局はなると思うのです。あるいは、民族の持っているくせというようなものをどういうふう考えるかということにもなると思いますが、また同時に地域研究というのはそれだけではないような気もいたします。私が先ほど申し上げましたように、現代世界のさまざまな発展を考える場合の総合的な、まさにインターディシプリナリーな、マルチディシプリナリーな学問として考えていいのではないかと。

そういう前提の中で、若干自分の専門に近いところでお話してみますと、地域研究は、もちろん学問それ自体としても幅の広い、奥深いものだと思いますが、それは政策科学的にもこれから重要ではないか。この点は、学問が政治や外交に直接役立つべしということでは決してありませんが、たとえば、日中外交、日中間の摩擦、いろいろ摩擦がありますね。日中友好とだけ言っていられない問題がさまざまに出てきますし、これからも出てくると思います。

しかも日本と中国との経済的・社会的格差が、1人当たりG N Pに直しますと100対1という大きな格差があるという現実、この格差はさらに広がるであろうという展望を考えますと、ここ少なくとも半世紀や1世紀以上は、日中関係にはしょっちゅういろいろ問題が出てくる。偽装難民であるとか、出稼ぎ労働者、留学生の大群というものも、いくら規制してもしきれないようなものが、これだけの日中間に経済的・社会的格差があると起こるわけでありまして、その場合にどのように日中関係を考えるかというような外交問題について、実は最も欠如しているのが地域研究的なアプローチによる政策が立案されていないことだと思います。

卑近な例で言いますと、大阪高裁が京都の光華寮裁判というのをやったことがあります。この場合に中国が主張したことは、日中共同声明の原則に違反する、あるいはそれは日中平和友好条約の原則違反だということをおおらかに主張したわけでありまして、日本側は三権分立の立場から、原則を主張いたしました。つまり、ここで原則と原則がぶつかりあってしまった。

少し地域研究的なアプローチで中国の外交的出方というものを考えてみますと、もっと違った対応ができるわけですね。つまり、原則というのは、中国は、長い伝統文化の中で、あるいは日常生活の規範の中で考えますと、人間関係の最も基本的な要素であるメンツの問題とからんでまいります。メンツの問題というのは、もう一つ別の言い方をすると、名という問題にからんでくるわけですね。

そういう中国の政治文化、常に名を重視する、メンツを重んずる伝統からすると、原則は譲らないということになるわけですが、そのへんのところに少し我々が注意して考えていけば、原則を強く主張しても原則の周辺にはある種のアローアンスがあるというこに気づいてきます。中国には、名実ともにという言葉とともに、名は実の賓なりという言葉があります。賓客、お客さまとして奉っておけば、名さえ取れば実際は

どうでもいいよというのが中国の出方だとすると、その中国の出方をさぐるのが、実は日本外交の政策立案のキーであるはずですが、わが国の政府、外務省の対応の中には、少なくともそういう地域研究的アプローチというものがまったく欠如しているがゆえに、外交政策においても、ポリシーメイキングにわたっても、いつもヘマばかりやってしまうということもあるような気がいたします。

これは非常に卑近な例を申し上げたわけでありまして、もちろん地域研究というのはそんなに安っぽい外交政策のためにだけ役立つようなものではないと思いますが、少なくともそういうことも言えるような気がいたしております。

もう一つ、私どもがいま当面している問題で、文化という問題をどう考えるかという突拍子もないようなことを申し上げさせていただきたいと思うのですが、私ども、いま「東アジア比較研究」の中の一つの論議は、東アジアの発展というものを儒教文化との関連でとらえることができるかどうかという議論ですね。私どもも、すべてその尺度でやっているわけではございませんけれども、そういうテーマのプロジェクトチームをつくっております。メンバーの中ではやっぱり意見が2つに分かれる。これはわが国だけじゃなくて国際的にも2つに分かれるわけですね。

例で見えますと、日本研究でも、ハーバード大のエズラ・ヴォゲルさんの日本についての評価と、カリフォルニア大のチャルマーズ・ジョンソンさんの日本についての見方は分かれるんですね。両人とも私の非常に親しい友人であります。両人とも中国研究から出発して日本研究に移ったということもありまして、私も若いころからよく知っているのですが、2人の間はライバル関係でもありますし、議論も分かれています。

エズラ・ヴォゲルさんの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』に書かれているように、ボーゲルさんの考え方というのは、日本の文化、特に江戸時代以来の文化なり教育というもののあり方を高く評価するわけですね。これに対してチャルマーズ・ジョンソン氏は、むしろ彼の『通産省

と日本の奇跡』という本に表れているように、日本の官僚システム、特に戦後の官僚組織の再編などというところに非常に重点を置いて考えますから、そうしますと文化よりもシステムだという考え方、制度を重視する考え方ですね。こういう考え方が一方であると思います。これは“Culturist”と“Institutionalist”の対立と言ってもよいと思います。

ある意味では、前に梅棹先生がおっしゃっていたと思いますが、梅棹先生も日本が優秀でこれだけ発展しているのには縄文以来の文化的伝統がかかわっているということをおっしゃったのに対して、ある政治学者はそれはそうじゃないんだということをおっしゃって、そういう考え方の違いがそこにはあると思うのですね。

そこで、この間も大磯でこの問題をめぐって「東アジア比較研究」の全体会議で私たちは議論しました。最近もさかんにこういう議論をしている「日本近代化論」でみなさんご承知のロナルド・ドーアさんは、2年前に *Taking Japan Seriously* という本を書きました。これは、全編日本がこんなにうまくいっているのは儒教文化が背景にあるんだということを、ドーアさんほどの人が言うわけですから、いい加減な議論ではなくて非常に緻密な議論をされている。特に日本人のビューティフルネス、義務感、責任感というものは、西欧のプロテスタンティズムとはまったく違う儒教的な土壌の中で生まれたものだという形で儒教文化に光をあてている。

たとえば、コロンビア大学のセオドア・ドバリーさんは、ご承知のようにコロンビア大学の東アジア、特に中国の儒教、朱子学の権威でありますけれども、彼などは儒教というと何か封建的で古臭いという先入観を持ちやすいわけですが、つまり儒教というと近代化への拘束要因と考えるわけですが、ドバリーさんみたいに、儒教の中にリベラル・トラディション、非常に自由な、特に朱子学の中に自由の伝統を見出そうというような議論もあります。

総じて、ヨーロッパとか欧米の学者の中に、日本だけじゃなくてなぜ

韓国も台湾も、あるいは香港、シンガポールも同時に発展してきているのかという、従来の近代化理論ではつかまえられる、そこを考えるカギとして儒教文化論を強調する人たちが非常に多い。ある意味ではブームだと思うのですね。

私は、この問題をやはり重要に考えなければいけないという立場であります。同時に儒教があれば産業化、近代化ができるというのであれば、中国は孔子の時代から工業化していなければいけないわけでありまして、そういう無茶苦茶な議論はできない。そこでいま考えられていることは、少なくともポスト・コンフィューシャニズムと言われるような儒教文化を通過した、あるいは儒教的な文化の枠組みを持っている社会を背景とした地域の近代化というところで議論がだんだん煮詰まっています。

それは、我々日本人が論語をどれだけ知っているかとか、四書五経をどれだけ読んでいるかということではなくて、儒教文化の社会的背景があるところとないところではいろいろと違うのではないかということです。特に、さまざまな要因によって近代化、産業化が押し進められたときに、つまり一度テイク・オフした社会においては、儒教的な文化の伝統があるということが、産業化、近代化にとって拘束どころか、それを促進し、しっかりしたものにしていくんじゃないかという議論が一方出てきておりまして、私の考え方もどちらかというところとそれに近いわけですが、こういう問題があるわけです。

特に中国とか東アジア諸地域のように、たとえばアメリカとかオーストラリアとは違って、何千年という文化の歴史を持つところでは、社会発展を考える場合に、地域研究において文化というものをどう考えるかは非常に重要な問題点だと思います。ただその場合に私は、文化という問題を非常に重視しなければいけないと思うのですけれども、同時に中国のような一つの小宇宙のような世界に関しましては、よほど注意しないと何でも文化で説明してしまうということになりかねないわけですね。

ハーバード大学の碩学ベンジャミン・シュウォルツ氏がいみじくも言っているように「中国のような数千年の文化を持つところでは、自分の理論に合わせてどんな文化的傾向でもそこから取り出すことができる。また反対の論者はまったく別の文脈でまったく同じ証拠をもってきて論理を組み立てることもできる。差引の結果はゼロで、何も説明したことになる」。確かにこういう傾向もあるのではないかと思います。

しかしながら、やはり文化の問題、特に政治文化 (Political Culture) なんていう問題をどういうふうに地域研究が取り入れていくかは、非常に重要な問題でありまして、ある意味では、そこに地域研究というものの、特に東アジアの場合には、大きな特色があるように私は考えております。

さてそこで、中国研究を地域研究の立場で考えなければいけないと常に感じている者の一人として見ていますと、一方において中国認識というものの座標軸がなかなか設定できない、という問題があったわけです。たとえば、中国というと本当に中国が好きで好きでたまらないというような人が中国研究をやる場合には、特にそうでした。たとえば、最近もシルクロードブームというものがあるわけですが、もちろん私もそういうところにロマンを感じますが、シルクロードが中国にとって本当に意味を持ったのはマルコ・ポーロが遠くベネチアから片道をシルクロードでやってきた元の時代ぐらいまででありますから、そのロマンの中で現在の中国を考えてしまうととんでもない思い違いをすることになる。。

現在の実際の中国は、ものすごい人口を抱えた、わずかなスペースしかない国です。面積は日本の26倍といっても、日本列島の3倍ぐらいの実際の有効面積しかない。人間の住める空間というのはそれぐらいしか中国はないわけでありまして、その中に10倍以上の人口がひしめいている社会でありますから、ロマンと現実との間にもものすごくギャップがあるわけですね。私どもは、その両方を受け止め得るような座標軸をつ

くっておかないと、特に中国研究の場合にはいろいろ問題が起きる。そういう場合にもやはり地域研究的なアプローチというものが、私はかなり有効ではないかと思えます。

そこで私自身は、従来から現代中国学なんてことを言ってきたわけですが、これはいわば従来支那学、シノロジーというものがわが国にも存在してきたわけでありまして、一方ではジャーナリズムの世界などにおいてチャイナ・ウォッチングというような言葉もある。つまり中国の動向をしょっちゅう追うという仕事ですね。いずれにしても、中国というものが非常に大きな対象であるがゆえに、中国研究をめぐるでも、シノロジーからチャイナ・ウォッチングまで様々な分野が存在してきたと思えます。私自身は、ある種の地域研究的なアプローチによって中国を考察することができるのではないかということで、現代中国学ということをはじめてまいりまして、最初にそれを自分で略歴なんかのところに書くのはすごく気恥ずかしいことでもありました。

なぜ現代中国学なのか。自分としては、Contemporary China Studies という言葉をあてたつもりですけども、当初は気恥ずかしかったんですが、最近ではおかげさまで日本の中堅の研究者の間にも、現代中国学というふうに肩書に書く人が出てまいりました。それはある意味では、いわゆる中国研究というものがチャイナ・ウォッチングとか、そういう形で学問として低くみなされたことに対する私の反発でもあるわけですね。しかしながら、今日はまさに Contemporary China Studies の国際的コミュニティが非常に大きく育ってきておりますし、わが国にもそれなりの厚い層ができてきております。特に世界的には、アメリカは言うまでもなく、フランスであるとかソ連も最近非常にさかんですし、そういう現代中国学のコミュニティがございます。そういうものの中で考えたときには、やはり Contemporary China Studies 現代中国学ということを目指せるのではないかと。

ところで、一方ではこういうことがよく言われるのです。中国、特に

現代の中国を研究したり分析するなんていうのはとんでもないことだ。どうせ中国というのはわからない、群盲象をなでるがごときものであって、特に新中国の政治分析、動向分析なんかを学問としてやるのはけしからん。それはジャーナリズムにまかせておけばいいんだというようなことを言う私どもの先輩なんかもいらっしゃるわけです。

私は、そういう言葉を聞くたびに非常に反発を覚えまして、そこが私が現代中国学なんてことを言いはじめた一つのモチベーションになっているわけですが、私は決してそのようには思いません。

確かに中国はすごく変動の幅も大きいし奥行きが深いけれども、そうであるからこそ研究対象としてきちんとした方法論と問題意識さえあれば、かなり問題点がはっきりつかめると思うのです。そうであるからこそ、また現代中国学が必要なんだと思うのです。もしそれがつかめないとすれば、それは現代中国学とか中国研究ということの名乗るのがおかしいわけでありまして、今日の激動の中国であっても、大筋はつかめると思いますね。

明日どういうことが起こるかということ予測することはできません。しかしながら、現在の中国にどういう問題があって、この社会が大きくどういう方向にいく可能性があるかということは、さまざまな方法なり資料的作業を通じればつかめるんだ、と私は確信しております。そういう意味での中国研究というものを切り開いていかなければいけないのではないか。

それにはどういう分析方法、あるいはどういう視角があるかということになりますけれども、もちろん『人民日報』などはいまでも非常に大きな情報にもなりますし、データにもなる。それをどういうふうに読みとるか。どういうふうにテキスト・クリティックをするかということも大事な作業だと思います。そして同時に、中国というような対象をできるだけ客観的あるいは操作可能な方法によってつかむような方法論を身につける。それから、先ほど申し上げましたような中国の政治文化や中

国民族の発想の特異性、あるいは中国社会の伝統などをよくつかむこと。そういうことに忠実であれば、中国についての大筋はつかめる、と私は思っているのです。

ところが、こういうごくごく常識的な枠組みをつくること、つまり地域研究的なアプローチをきちんと身につけていないがために、そして一方で中国が好きであるとか、かつての中国革命に共鳴するとか反発するとか、そういうところから入って行って、そのレベルだけにとどまっているために、中国を見る場合の常識のレンズがくもってしまう。あるいは、座標軸が曲がってしまうんですね。そもそも座標軸が曲がったり常識のレンズがくもっていれば、あの巨大な社会変動の多い中国社会をまともに受け止めることはできない。それはいわば中国というものを地域研究の対象としては考えなかったからではないか。言ってみれば、新しい学問研究の対象として中国を見ていたのではないということになってしまうような気がいたします。

中国自身が非常に大きな幅で変動しているのに、自分自身の座標軸が非常に狭いものであったり、ある意味では非常にイデオロギ的な先入観に偏っていたりしたら、とても中国はとらえられない。また、あるいは、葦のずいから天をのぞくような形で中国を見ていては、中国全体をつかめないということもあります。従って、グローバルな視野の中で中国をつかむということも、大いに必要になると思うのですね。

地域研究をやる場合、特に中国なんかの場合に、非常にマクロな細密画は描くことができるけれども、全体像がまったくつかめていないということがよくあるわけですし、そこにも一つの問題点があるような気がいたします。

私自身は、今後の中国を見る場合に、中国はこれからは二つの圧力によって動かされていくだろうと思います。一つは、いままでと違って非常に水平的な圧力ですね。水平な圧力、まさに最近の天安門事件の分析をしてみてもそうなんですけれども、外の世界からのインプッ

トがものすごい。そういう状況の中で中国民衆がいま大きく目覚めようとした。その目覚めがあまりに早かったがゆえに、硬直した考え方しか持つことのできない革命第一世代の中国共産党の長老たちがびっくりしてしまって、力によって抑えたというのが今日の状況だと思います。もう一つは、垂直的な圧力というのでしょうか、いまの中国は、もはやかつての解放前と比べて生活が良くなったというようなことだけを言っていられないような内在的な圧力がますます大きくなりますから、その二つの圧力に耐えていかなければいけないような気がいたします。

こういうことを考えると、たとえば、非常に生臭い話で恐縮ですが、ポスト鄧小平の中国についてもほぼ予見できると思うのですね。あの天安門事件を軍事力によって抑え込んだあの力だけでこれだけ問題が大きく動こうとしている中国を、果たして抑え切っていくことができるかどうか。それをやっぱり読めなければいけないと思うのですね。

そこで中国の場合に、中国の変化を見るための三つのポイントを考えてみたいと思いますけれども、一つはこれまでの中国は孔子の時代から毛沢東の時代に至るまで、非常にイデオロギー的な国家だったことについてです。そういうイデオロギー国家としての中国において、イデオロギー性というものがだんだん弱くなっていくわけでありまして、そのときにどういう統合のシンボルが有効かという問題があるような気がします。

2番目の問題は、先ほど申し上げましたような中国民族の非常に特殊な個性についてでありまして、その個性がいわばいろいろ浸食されていく、腐食されていく。つまり中国民族の属性というものがどうなっていくかという問題が、やはりこれから大きいような気がいたします。中根千枝先生の「日本タテ社会論」に対してと言うと不遜なように聞こえますが、私は従来、中国は「ヨコ社会」つまり地縁、血縁のネットワークが張りめぐらされている潜在的なネットワーク社会、ヨコ社会だと見てきましたが、そういう社会の中で、つねに中国的な一元性というも

のがあったと思うのですね。チベットの問題にしても何にしても、中国というのはみんな分解して分かれたほうがいいに決まっていると一見思われるけれども、なかなかそれができない。あるいは、中華民族、中華帝国においてはそれがなし得ないという問題がありましたけれども、そういう数千年来の伝統が、これからのまさに大きく変わりつつある国際社会の中でどのように変わり得るかという問題がはじめて中国にも出てきたのではないかという気がいたします。

それとの関連で申し上げますと、にもかかわらず中国というのは結局変わらないという見方があったわけですね。私も基本的にはその見方をとってきたわけでありましてけれども、やはり中国は今後かなり変わるのではないか。変わる場合にどのように変わるのか。本質はどういうふうになるのかという問題ですね。ここは、非常に重要なところではないかと思えます。

従来は、たとえば中国は変わらないというのは、マルクス主義の立場でも基本的にアジア的停滞とか、東洋的専制とかアジア的生産様式という用語があったように、ある意味では中国というのは変わらない世界だと言われてきましたね。マルクスに影響を与えたヘーゲルもそうで、「東洋的世界」なんていうヘーゲルの概念は、ある意味では非常に停滞的な中国をみていた。そういう中で一方に、戦後わが国には、変わる中国という議論だけが出はじめていたと思えます。特に文化大革命によってすっかり中国は変わったという極端な議論がありました。そういうときには、かつての京都大学の矢野仁一先生みたいな中国論は一方ですごく光るわけですね。

しかしながら、そういうものを踏まえた上で、今後の中国が一体変わるのか、変わらないのか。変わるとすればどういうふうになるのかという問題をいよいよ考えなければいけない。

同時に、もう一つだけ問題を申し上げますと、そういう中国が国際関係においては、従来アジアにはいわばチャイニーズ・ワールドオーダー

というようなものしかなかった。そういう階層的な世界秩序しかなかったと思うのですね。ヨーロッパのようにウェストファリア体制みたいな均質的なヨーロッパ・ステーツ・システムのようなものが欠如していたアジアには、中国的世界体系しかなかった。あるいは南アジアまで入れるとインド的なワールド・オーダーがあったかもしれませんが、少なくとも東アジアにおいてはそうである。そういうものが一体どうなるかという問題も、これから本格的に出てくるような気がいたします。

これらの問題を考えますと、中国問題を地域研究の立場から考えなければいけない、あるいは研究しなければいけない領域は非常に多面的だと思うのですね。にもかかわらず、残念ながら、私は若干強がりを持ってこんなことを申し上げてきているんですけれども、わが国におきましては地域研究というものをもっと組織的に推進する基盤が欠けているような気がいたします。

私どもの海外事情研究所について先ほどの紹介では過分なお言葉をいただいたのですが、現実はそのように自慢できるものではありません。たまたま大学の組織の中に人文・社会科学の立場から地域研究をやっている人、また、各語学科の中に必ず事情講義をやっている人がいますから、そういう人たちがみんな集まって、ヨーロッパ、アジア、中近東、アメリカと何人もいますので、何とかやっているというのが実際の状況なんですね。海外事情研究所というのは創立35周年になりまして、いまその記念の公開講演会を連続で私どもの大学でやっており、毎回多くの聴講者を集めています。しかしながら、実際には寒々としたものでありまして、運営上もかなりいろいろ問題を感じております。

私どもの大学のことをちょっと申し上げますと、地域研究のための大学院がいまから12、3年ぐらい前にできました。これは筑波と外語と、その後広島大にもできましたけれども、広島はまた改変されました。できることはできたんですが、十数年たってみますと、いろいろそこに問題がたまってきておりまして、いまどういうふうにこれを改変するかが

課題になっております。

同時に、わが国には、地域研究において P h D が取れる体制がないわけですね。国立民族学博物館には昨年から一足先によくできたのではないかと思いますけれども、普通の大学の中ではそれがまだない。どうしても博士過程が必要になってまいりまして、私自身が博士過程設置専門委員会の議長としてここ 3、4 年文部省といろいろ折衝してまいりまして、ようやく昨年調査費が大学教育改善費の一部としてつきまして、来年度はそれが大学院設置のための調査費になりますから、後 2 年か 3 年たちますと小さな博士過程が多分できると思います。

しかしながら、これも語学のほうと一緒にやるわけで、結局そこでも語学の先生方といろいろぶつかりまして、一時はどうなることかと思っておりました。なにしろ多勢に無勢ですから、結局本当は地域研究研究科をそのまま博士課程にしたかったのですが、どうしても妥協せざるを得ず、地域文化研究科という形になりました。そして、一専攻でできるんですけれども、結局定員が、多くて 1 2、3 名のものではないかと思うのです。そうすると、そのうち半分を地域研究で半分を言語にしましても、ほんのわずかの定員しか確保できません。しかし一般の国立大学でそういうものができるとなれば、そういう意味では非常に珍しいものかと思えます。修士過程から一貫して地域研究ないし地域文化を研究するコースができる。

従いまして、こういう問題一つをとってもどういうふうに考えていくべきか、お考えになっていらっしゃる先生方にぜひいろいろお知恵をお貸しいただければ幸いですと思っております。

そんなこともありまして、私どもの大学で、文部省へ出すために、地域研究の推進に関する各界の要望なんて資料を取りまとめたものがありますので、それをご参考までに置いていきます。地域研究の重要性がいろいろ言われていながら、なかなかそれが組織として実らない。

しかしながら、この点については、私どもいろいろ提言をしてまいり

ました。たとえば、ちょっと思いついたままですが、早くも、昭和55年に、大平内閣のときに、梅棹先生なんかの田園都市構想とか、私もメンバーでしたが、環太平洋連帯構想ということが言われまして、その中の最終報告では、環太平洋連帯という抽象的なことを言うよりも、日本としては何をやるべきか、日本における地域研究の充実、地域研究に関する、まさに国際的な協力こそが必要だというレポートがあります。

環太平洋連帯構想は日本の一種の外交的スローガンであったわけですが、こんなふうに書いてあります。「日本の諸大学、研究機関でも、近年地域研究の重要性がますます広く認められつつある。地域研究に関連した学科や講座を持つ大学も増えつつあり、地域研究に向けられた大学院の研究科や研究所もいくつか存在している。このような既存の教育研究機関をさらに拡充することは差し当たり可能なことであるが、より根本的な改善を必要とする多くの問題がある。たとえば、第二次大戦後日本にとって最も密接な国であるアメリカの研究について言えば、近年着実に進展し、それに関する教育プログラムも充実してきているが、専門家の層は依然として薄く、資料・文献センターも質量ともに不十分である」。

実は本間長世先生がこの部分をお書きになって、私も一緒に中国アジア関係について書かせていただいたんですが、ご承知のようにアメリカ研究もアメリカ・センターができてきているものの、私ども東京周辺の近接の分野で見えていますと非常に手薄なんですね。たとえば、アメリカ外交史、斎藤真先生がやっていらっしゃったあの分野とか、最近有賀貞先生なんかいらっしゃるのですけれども、他にどれだけ人がいるかというようなことを考えますと、本当に寥々たるものなんですね。そういうところを教育する機関もないんです。

たとえば、斎藤先生はいまICUにいらっしゃいますけれども、後1年で定年になられますね。そうすると、東大でアメリカ外交史が、法学部の中には若干そういう部分もありますけれども、駒場の国際関係の方

にはそういうものがあるかということと本間さんも退官ですから、おそらくきわめて手薄になるんじゃないでしょうか。

一つの分野、たとえばアメリカ外交史という重要な国際関係の分野を取っただけでも、このような状況です。まったく大学はものすごく数がありながら、実際には寥々たるものです。同じようなことは、中国研究なりそれぞれの地域の研究についても言えると思います。こんなようなことをいろいろと私ども、当時提言したこともございます。

「また、研究の専門分割、その相互の必要性から見て、同じ研究分野に重点を置く大学研究機関が相互に協力して、連合大学院博士課程をつくり、研究の推進と研究者の養成を図ることも一つの有益な方法と考えられてよいであろう。さらに大胆な試みとして、まったく新しい構想に基づく研究機関の設立も検討に値する。地域研究はその学際的な性質からしても、対象地域の言語の習得やフィールドワークを必要とすることから見ても、既存の研究体制の枠に入りがたい。従ってこの際、一種のパイロットプランとして、太平洋地域に重点を置いた地域研究のための大学院大学を新設するのも一案であろう。この大学院大学は、世界各地からの学者や学生に広く門戸を開き、真に国際的な構成を持ったものとするべきである」。

これはたまたま環太平洋連帯構想ということだったものですから、太平洋地域ということが対象になりましたけれども、広く、まさに板垣先生のイスラム地域にしても、すべての分野についてそういうことが言えるんじゃないかと思っております。そんなようなことがすでに提言されております。

最近では、国際政治学、あるいは国際関係論と地域研究との関連いかなという問題が一つありまして、これについて、私も日本国際政治学会で報告をいたしましたけれども、国際関係論が一方で最近非常にさかんなのですね。どこの大学でも、特に私学では国際関係論、あるいは国際関係学科みたいなものをつくれればいいという風潮がありますけれども、実

は国際関係論というのは、言ってみれば上部構造なのであって、地域研究がまさに下部構造であり土台なんですね。ここがしっかりしてない限りいかに国際関係論と言ってもだめなのであって、そういう意味から言っても、国際関係論がブームになるならば、本来、地域研究はもっともっと広がっていかねばいけないと考えております。

そういう意味で、文部省も、私どもなどの東アジア比較地域研究に、「重点領域研究」として予算をつけてくださったんだろうと思いますが、それだけではなかなか制度や組織に結びつかないのではないかと。私どもの国際シンポジウムでも、あるインドの研究者は「日本はいまやこれだけ発展し国際社会の中で大きな地位を占めているにもかかわらず、それに相応して、はたして地域研究のためにどれだけお金を使っているのか。どれだけ地域研究が日本で拡充されているのか。これは全く貧困だ」と言って、ある意味での日本批判を展開したわけです。

インドは、ご承知のように、経済的にたいへん苦勞しているようですが、ありますけれども、ジャハワラルネルー大学（JNU）のように地域研究専門の大学院大学ができています。あるいは、インド以外にもオーストラリアなんかは、私も1年間いましたけれども、ANU（オーストラリア国立大学）のように地域研究専門の大学院大学が、かなり大きな規模でできている。それなのに、こんなにお金を持っている日本は、地域研究専門の大学や大学院があるのかと言われたときに、非常に私どもも肩身の狭い思いがいたします。

このインドの研究者は「アジアでは日本とインドが地域研究を地道に発展させてきた。東京大学、東京外国語大学、アジア経済研究所、京都大学東南アジア研究センター、北海道大学スラブ研究センターなどは中でも重要な貢献をしてきた主要な研究機関である、云々」といろいろサーベイをした上で、まさにこれからのアジアのあるべき姿として、地域研究の組織を拡充することを非常に強く提言されております。

また、地味な学会でありますけれども、すでに昭和57（1982）年に東

京外国語大学で開かれたアジア政経学会で「地域研究の新しい展開」をテーマとしたことがありまして、石井先生にもご報告いただいておりますし、そこでもそれらの問題がすでにいろいろ出されていたような気がいたします。

いろいろ散漫に述べましたけれども、ある意味では地域研究を文字通り組織化されている国立民族学博物館なんかの懐を貸していただきまして、ぜひ私どもにも今後いろいろご支援いただくと同時に、やはり日本がいよいよ本格的にこの問題を考えなければいけない時期に到達しているのではないかと考えております。

「地域研究の推進の方策に関する
共同研究」報告

「地域研究の推進の方策に関する共同研究」共同研究会

1990年3月

目 次

第 I 部 研究の概要と成果

1. 趣 旨…………… 1
2. われわれのめざす地域研究…………… 2
3. わが国における地域研究の現状…………… 3
4. 新たな研究機関設立の必要性…………… 4

第 II 部 わが国における地域研究及び組織について

1. はじめに…………… 7
2. 各報告要旨…………… 9
 - 1) 東アジア
東アジア（中国）の地域研究の現状ならびに東京外国語大学に
おける地域研究……………中嶋嶺雄… 9
 - 2) 東南アジア
京都大学東南アジア研究センターの組織について…石井米雄… 29
 - 3) 南アジア
東京大学東洋文化研究所の研究状況および南アジア地域研究に
ついて……………山崎利男… 35
 - 4) 中東
中東の地域研究について……………板垣雄三… 41
中東地域研究——私学の立場から……………黒田壽郎… 44
 - 5) ロシア・東欧
スラブ（ロシア・東欧）地域研究および北海道大学スラブ研究
センターについて……………伊東孝之… 51
 - 6) 西欧
ヨーロッパの地域研究について……………樺山紘一… 62
 - 7) アフリカ
アフリカ地域研究について……………米山俊直… 67

	京都大学アフリカ地域研究センターについて……伊谷純一郎…	70
8)	北米	
	アメリカ地域研究について……本間長世…	73
9)	ラテン・アメリカ	
	ラテン・アメリカ地域研究と東京大学教養学部教養学科中南米 分科について……増田昭三…	81
10)	オセアニア	
	オセアニア地域研究について……石川栄吉…	85
11)	その他の関連機関	
	国立民族学博物館……佐々木高明…	88
	上智大学アジア文化研究所……石澤良昭…	92
	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東洋文庫、 ユネスコ東アジア文化研究センター……北村 甫…	97
	中東学会およびアジア経済研究所……宮治一雄…	106
12)	エリア・スタディーズとリージョナル・サイエンス	
	地域研究のふたつのタイプについて……山田浩之…	114

〈付〉「地域研究の推進の方策に関する共同研究」共同研究者名簿